

# TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日：2019年8月3日
<p>出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙</p> <p style="padding-left: 40px;">岡田沙也加（気象予報士）中根夕希（RCC 中国放送アナウンサー、原爆の特集を取材）</p> <p style="padding-left: 40px;">真木明（元裁判官の特集を取材）</p>		
<p>検証テーマ： 日韓関係、オープニング、北朝鮮問題、池袋事故で厳罰化を求める署名</p> <p style="padding-left: 40px;">【特集】 原爆の記憶をどう伝えていくのか</p> <p style="padding-left: 40px;">【特集】 裁判所に挑む“伝説”の元裁判官</p>		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日韓関係</li> <li>・ オープニング</li> <li>・ 全国 159 地点で 35℃以上の猛暑日</li> <li>・ 週間天気予報</li> <li>・ 北朝鮮問題</li> <li>・ 京アニ放火殺人事件の犠牲者名公表を受けて献花に訪れるファン</li> <li>・ 「コスプレサミット」でも犠牲者追悼</li> <li>・ 夏の甲子園の初戦カードが決まる</li> <li>・ 静岡県沼津市で一輪車の全国大会</li> <li>・ 高知県高知市で「まんが甲子園」</li> <li>・ 池袋事故で厳罰化を求める署名</li> <li>・ 短期滞在の間に空き巣を繰り返した韓国籍の男が逮捕</li> <li>・ 【特集】 原爆の記憶をどう伝えていくのか</li> <li>・ 【特集】 裁判所に挑む“伝説”の元裁判官</li> </ul>		
<p>放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日韓関係：結論→特に問題なし</li> </ul> <p style="padding-left: 40px;">日韓関係について以下に朱記したような VTR が取り上げられていた。</p> <p style="color: red;">"韓国市民「糾弾する、糾弾する」</p> <p style="color: red;">ナレ「これまでホワイト国と呼ばれてきた輸出管理上の最優遇国グループ A から韓国を除外する、日本政府のこの決定に韓国では反発が広がっています。」 "</p> <p style="color: red;">"ナレ「国を上げて日本に対抗する姿勢を鮮明にしている韓国政府は今朝、」</p> <p style="color: red;">イ・ナギョン（韓国首相）「日本は超えてはいけな一線を越えた。断固として対応しないわけにはいかない。」</p> <p style="color: red;">ナレ「イ・ナギョンは日本政府の決定を韓国に対する二度目の報復だ、とした上で日韓関係や日米韓参加国の安保協力に亀裂を生む措置だと批難しました。ソン・ユンモ産業通商資源相は日本による輸出管理強化に対する韓国政府の支援策の伝達や民間企業等から相談を受けるなどために官民合同で設立された機関を視察。職員一丸となったの対応を要請しました。」</p> <p style="color: red;">ソン・ユンモ産業通商資源相「問題や被害は発生する場合に政府の支援策をみなさんがどれだけしっかり伝えてくれるかが重要な鍵になります。」</p> <p style="color: red;">ナレ「今朝の韓国各紙はハンギョレ新聞が経済戦争を選んだ安倍総理、キョンヒャン新聞が安倍総理の暴走と報</p>		

じるなど、批判的な論調が大勢を占めています。」 "

ナレ「中国北京では RCEP 東アジア地域包括的経済連携の閣僚会合に世耕経済産業大臣、韓国のユ・ミョンヒ通商交渉本部長らが出席。会合の場で韓国側が日本の措置は不当と主張したと見られます。」

"記者「大臣、接触は今日はもう完全になしですか。」

世耕経済産業大臣「それは全くありません。」 "

ナレ「溝が深まるばかりの日韓関係」

"今林隆史（報告、ソウル）「日本の経済挑発を糾弾するというプラカードを持った人たちが日本大使館前に集まり抗議の声を上げています。」

ナレ「ソウル市内ではこのあと午後七時から大規模な抗議集会が開かれる予定です。」 "

このトピックに当てられた時間は 145 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・ オープニング：結論→特に問題なし

番組のオープニングで金平キャスターが「ええ、歴史を紐解きますと、日本は 1910 年に韓国を併合し、35 年にわたって植民地支配を続けました。それが敗戦で終わりを告げ、両国の国交が樹立されるまでになんと 20 年かかりました、築き上げた関係が崩れるのは一瞬です。ここは頭を冷やすときです。」とコメントしていた。このシーンに当てられた時間は 20 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・ 北朝鮮問題：結論→特に問題なし

膳場キャスターの「北朝鮮は金正恩党委員長が昨日、新開発の大口径ロケット砲の発射実験を再び視察したと発表しました。」というコメントを導入に以下に朱記した VTR が取り上げられていた。

ナレ「北朝鮮の国営メディアは今朝、キム党委員長が昨日未明新たに開発した大口径操縦ロケット砲の試射を再び指導したと報じました。北朝鮮が昨日発射した飛翔体を指すといいます。朝鮮中央通信は高度を抑制して水平飛行させる性能と起動変速能力などが確認されたと報道、金党委員長は大きな満足の意を示したということです。北朝鮮は先月 31 日に発射したものについても大口径操縦ロケット砲としていますが、韓国軍は昨日のものも含め短距離弾道ミサイルだと飲み方を示しています、一方発射実験についてトランプ大統領はツイッターで国連決議違反かもしれないが、金党委員長が私を失望させたいとは思っていない、として問題視しない考えを示しました。トランプ氏は国連決議違反の可能性を認めたのは初めてですが、それでも北朝鮮を非難しない姿勢には各国からの反発が起きそうです。こうしたなか国連の専門家パネルが北朝鮮による制裁逃れについて今年の中間報告書を安保理の制裁委員会に提出したことが JNN の取材でわかりました。報告書はアメリカなどが示した証拠を踏まえ、北朝鮮がせどりで石油精製品の密輸入を繰り返すなど国連制裁の違反を続けていると指摘、ただ中国やロシアに配慮して表現は一部弱められたということです、報告書の好評に向けて安保理内で合意できるか注目になります。」

このトピックに当てられた時間は 116 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・ 池袋事故で厳罰化を求める署名：結論→特に問題なし

東京池袋で乗用車が暴走し 12 人が死傷した事故で亡くなった親子の遺族らが運転手の男性への厳罰を求める署名活動を行ったとのこと、遺族の「少しでも再発防止をすることができればという思いがまず一番にあります、このような重大な事故できちんとしかるべき処罰を受けるということも再発防止に私はつながるというふうに見えるようになったので。」や「娘の真菜とね、莉子ちゃんがこの眼の前に戻ってきてくれるのが一番ですんで、ど

うすることもできなくて、本当に悔しいです。」というコメントが紹介されていた。このトピックに当てられた時間は 85 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】原爆の記憶をどう伝えていくのか：結論→特に問題なし

広島での原爆の記憶をどう伝えていくかについての特集が組まれており、以下に朱記したように VTR で取材の様子が取り上げられていた。

記者「被爆者の遺骨を安置している原爆・・・」

ナレ「広島、中国放送のアナウンサー中根夕希。夕方のニュースを担当している。福岡県出身の彼女は、自分と、原爆のかかわりを意識したことは無かったが、今年福岡県に住む 91 歳の祖母から、手記を受け取った。原爆に遭遇した思い出と書かれていた。」

祖母「被爆者手帳。爆心地から、2.0 キロ。」

ナレ「祖母、木村敬子さんは、かつて、広島の実家で暮らしていたころ、被ばくした。その体験を、これまで家族にも語ったことは無かったが・・・」

木村さん「夕希ちゃんだったら、心許して話せるから、という気持ち。わざわざこちらから、される、お話するようなことは何もない。体験を語ることもない。」

ナレ「中根アナウンサーと敬子さんは、74 年前の原爆の記憶を一緒にたどることにした。」

"ナレ「中国放送のアナウンサー、中根夕希は被爆した祖母、敬子さんと 74 年前の足取りをたどることにした。当時 17 歳だった敬子さんは広島女学院専門学校に通っていた。後者は爆心地からおよそ 1 キロの地点にあった。再建された学校には戦前の女学生の写真などが数多く残されている。1945 年 8 月 6 日の朝、敬子さんは既に登校していた。講堂での礼拝が終わり教室に戻ろうとしたときだった。」

敬子さん「ちょうどあの辺りです、窓のちょうど向こう側に見えるところ、ピカーと光ったのです、一発ね。あらーって言うてね。」

ナレ「倒壊した校舎から裸足のまま脱出した敬子さんは、ガラスや俱利が散乱し火の手が迫る街から逃げた。学校からおよそ 4 キロ離れた修練場にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。喉が渴ききった敬子さんが見つけたのは大嫌いだったトマトだった。」"

"中根アナ「でもそこにはトマトしかなかったんでしょ。」

敬子さん「トマトしかなかった。もうお腹ペコペコでしょ、食べた。それ以来好きになって食べた。それ以来、食べるようになった。」

ナレ「敬子さんが家族と再開できたのは翌日だった、敬子さんが 3 歳のときの家族写真。7 人兄弟のうち、長女の孝子さんと三男で末っ子の幸三さんが原爆投下後も行方不明となった。敬子さんと家族は行方不明の 2 人を探し歩いたという、その足取りを中根アナウンサーと敬子さん、その姉の良子さんの 3 人でたどることにした。」"

"ナレ「軍服や軍靴を作っていた陸軍被服支廠、長女の貴子さんはここで働いている時に原爆にあった。当時、敬子さんたちはここで死亡者の名簿を示され、孝子さんの名前を見つけた。」

大畑良子さん（木村敬子さんの姉）「ああ、ここでしんだんじゃね、ってお骨を持たって、誰のかはわからない、一緒くただから、」

敬子さん「もらったかいね、もうもらわなかったね。」

良子さん「もらって帰った」

敬子さん「もらって帰ったね、箱に入れてね。」

中根アナ「お骨があったの。」

敬子さん「いっぱいあったよ、他人の遺骨よ、みんな死んだ人の焼くんだから。夏でしょ。氏でしょ、1日2日置いていたらウジがわくよだから、どんどんどん焼いていくの、焼いていくか埋めていくかよね。とにかく。」

良子さん「もう、誰が誰かわからない。」

ナレ「当時、孝子さんの遺骨を特定できなかった敬子さんらは次に、弟の幸三さんを探しに言った、戦時中学生たちの多くは空襲による火事を防ぐために建物を事前に取り壊す、建物疎開に動員されていた。中学2年生の幸三さんもその一人だった。日陰のない場所での作業になるため、原爆の熱線を直接受けることになった。負傷者が運ばれた救護所は広島市近郊だけで50箇所以上、中でも学生が沢山運ばれたのは広島市から3キロの沖合にある、似島の救護所だった。当時の惨状を目の当たりにした住民に話を聞いた。」

"敬子さん「たくさん学生がここに運ばれてきたって。」

新江堤さん（島の住人、85歳）「患者が船でどんどん運ばれて押し寄せたよね。」

敬子さん「で、それを探しに来たんです、私達、家族がね。」

ナレ「似島には陸軍の検疫所があり薬品や医療器具が豊富だったため、臨時の野戦病院となった。被爆からおおよそ8日間で一万人が運び込まれたという。敬さんは救護所で幸三さんの安否を尋ねた。」

"敬子さん「ああ、さっき死んだっていう言われた、さっきまで生きてたって言われたの。遅かったねえっていうところだったんだよ。」

ナレ「なくなった人たちは島にほった穴に入れられまとめて仮想された。そこに幸三さんの遺体も投げ込まれたというのだ、多くの方が名前もわからないまま茶毘に付された場所は慰霊の場所として残されている。」

新江さん「ここで焼きよった。ここで夜、燃えるけんね。わしは家あのへんじゃろう、真っ赤に燃えるのがわかるんよね、夜じゃけえね。」

良子さん「私達も母と一緒にここで少し過ごしたんです、探しに来たとき、思い出してから。」

敬子さん「半日でも一日でも早ければ、死に目に会えたかもしれないね、」

中根アナ「ちょっとでもね、顔が見えたかもしれない。」

敬子さん「そうそうそう、死ぬまぎん輪にでもね、という思いはあったの。だけでも後の祭り、なんにもでない。」

ナレ「敬子さんのように原爆の惨禍を生き抜いても多くを語らず余生を送る人は少なくない、原爆の記憶をどう残していくのか。」

"ナレ「今年4月、展示を一新した広島原爆資料館、重点を置いたのは遺品や写真といった実物資料の展示だ。遺影やエピソードを添えることで被爆者を身近に感じられるようにしている、この日、一人の女性が久しぶりに原爆資料館を訪れた。大村宏子さん78歳、」

大村宏子さん「ああ、これか。」

ナレ「見ていたのはガラスケースに展示された子どもたちの遺品だ。」

大村宏子さん「満里子姉さん……」

ナレ「少し色あせたかばん、縫い付けられた名札には広島市立高女2-5、藤井満里子と書かれている。持ち主の満里子さんは当時13歳、宏子さんの9歳上の姉だった。」

大村宏子さん「もうちょっと色が、ちょっとついてたかなあという気は記憶の中でね、するんだけど、やっぱり会いたい。」

ナレ「両親と子どもたちの八人家族だった藤井家、満里子さんは年の離れた妹だった宏子さんをとっても可愛がってくれたという。」

大村宏子さん「ひょうきんな姉だっというのは言ってたから、多分きょうだいのなかで一番明るかったんじゃない

いか。」 "

"ナレ「1945年。8月10日、広島市立第一高等女学校の二年生だった満里子さんは現在の平和公園の直ぐ側で建物疎開の作業に動員された。そして、午前8時15分。」

大村宏子さん「8月6日のね、朝、私達居間でご飯を食べてて、誰かが風邪気味だったので、お医者さんについていってという時にドカンときたんわけですね。で、その瞬間はね、わたしたちはなんとなく記憶にある。真っ赤になったんです。」

ナレ「両親と5人の子どもたちは無事だったが満里子さんだけ戻ってこない、父親と長女は廃墟となった街の中で満里子さんを探し回った。原爆投下の三日後、崩れた土塀の下から満里子さんのかばんだけが見つかった。中に入っていたのは。」

大村宏子さん「何を入れていたかはみんな知らなかったのよね、はじき豆と、それと赤チンとそれから弟のおしめと入れてたでしょ、選択したね。」

ナレ「弟を思う娘の優しさに母親は涙を流した。被爆した街で娘を探し歩いた父親はまもなく原爆症でなくなった。」

大村宏子さん「子供を頼むぞと言って死んだよって言ってました。母はもうついていきたかったって。」

ナレ「母親は戦後、子どもたちを養うために懸命に働いた。」

大村宏子さん「私が知っている母はずーっと働いていました、銀行のあのいわゆる集金、保険おお金を集めて回る、それから下宿屋さんをしたり、だから働いている母しか覚えてないけどね。」 "

"中根アナ「満里子さんのかばんが入っていたのってどこ。」

大村宏子さん「多分ここに入っていたんだと思う。この引き出しに入れてたんだと。」

ナレ「戦後もかばんを大切に持ち続けていた母親。時折手には涙を流していたという。」

大村宏子さん「満里子ちゃんごめんね、ごめんねって、お母さんはなんか誤っていたのよっていうのを一番上の姉から聞いてね、それが一度でなく二度も三度もあったいうのを聞いて多分、本当の母の気持ちはわからないけどね、多分辛かったろうな、だって、先に逝っちゃったんだから、それもその普通の病気で死んだとかじゃないもの。」

ナレ「47年前、母親は娘の唯一の形見を原爆資料館に託してなくなった。その子、多くの時間収蔵庫で眠っていたが、今回、満里子さんという存在や顔↑宇野思いを感じてもらえると判断され展示された。数十年ぶりに姉のかばんと対面を果たした宏子さん。」

大村宏子さん「だめ、つらい。」

ナレ「その手には母親の数珠が握られていた、」

大村宏子さん「母はね、よく苦しまないで死んでいたら、それだけ救われるっていったことは覚えているのよね、いい方に解釈していた母を思い出します。みんなに見ていただいてね、何かを感じていただいてね、本当、。平和というのがどんなにありがたいものか、大切なものかを一人ひとりがもっともっとね、噛み締めてほしいしね。」 "

"ナレ「熱い、熱い、その言葉とともに展示された、幼い男の子の下着、血や油の後がにじむこの小さな下着には母親の思いが込められている被爆直後の惨状を記した母親の手記が残っている。」

母親の手記「おんぶしていた子供と二人が大やけどをしました。2歳4ヶ月の男の子はその日の夜、なくなりました。水をくれ、水をくれ、というのを水を飲むと死ぬと言ったら、それから一言も言わずに亡くなりました。」

ナレ「当時、2歳だった太尾田洋夫ちゃんと母親は爆心地からおよそ2キロ離れた広島駅で被爆した、ふたりとも大やけどを負い洋夫ちゃんはその夜、母親に看取られてなくなった。」

長谷部松子さん（洋夫さんの姉）「お骨になったというのも実感がわからないんですよ、今までほら、元気で一緒に遊んだりしていたもんだから。」

ナレ「姉の長谷部松さんは当時離れた場所において無事だった。母親は戦後、洋夫ちゃんについて口にすることは殆どなかったというマツコさんは子供が小学生の時に学校で被爆体験を話した。そのことを母親に伝えると、あの下着を渡された。松子さんはその時初めて、下着がとってあったことを知った。」

長谷部松子さん「我が子っていうか、色んな思いがあったんじゃないのかなと思いますよ、母親として、自分でもなんか話をしたかったのかもしれないなと思うんですよ。」

ナレ「熱い、熱いと言いながら息絶えた洋夫ちゃん、水を飲ませなかったことを後悔していた母親の姿が今も目に焼き付いている、」

長谷部松子さん「ずっと同じコップかわからないんですけども、もう筋がついて取れないくらい、毎日仏さんにあげて、押んでいたみたいですね。親として何もしてやれなかったというのがね、心に残っていたと思うので。」

ナレ「母親から託された下着は被爆 60 年を機に原爆資料館に寄贈された。今年、遺影とともに新たに展示され 74 年前の原爆の記憶を多くの人たちに伝えている。」 "

VTR をうけてスタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返し広げられた。

「前場貴子「取材した RCC 中国放送の中根アナウンサーです。ええ、中根さん、自分のおばあさまの被爆体験を始めて聞いてみて、どんなことを感じましたか。」

中根アナ「そうですね、思い出すのも辛いほどの経験だったんだな、というのを感じました。祖母には自分の苦しみを中途半端には伝えたくない、ちゃんと受け取っている人にしか話せない、という思いがあります。その中で今回、私が孫として祖母の思いを受け止めることができよかったなと思っています。今回 91 歳の祖母が元気だからこそ聞けた話なんです、今、広島では生の声を聞くことができる本当に最後の時期という危機感もあります。」

日下部正樹「あの、被爆体験を語るができる人、それがどんどん減る中で遺品の存在、これ非常に大切になってきていますよね。」

中根アナ「そうですね、広島原爆資料館には今、およそ 2 万点ほどの遺品が展示されています、そしてその一つ一つを学芸員が受け取る時には持ち主の被爆状況だけではなくて戦後その遺品を持っていた家族の思い、それも丁寧に聞き取っているのです。これまで受け取ってきた遺品そのものと、その背景にあるエピソードを保存することで遺品も今後は証言者としての役割を果たしていくのではないかと思います。」

金平茂紀「メディアでね、仕事をしている人間にとってはその広島長崎への原爆投下というのは決して忘れてはならないことですよ。あの、広島で働く中根さんにとって、何が今一番大事だと思いますか。」

中根アナ「はい、私達もこれまではその被爆された方の思いとして原爆、核兵器は二度と使用してはならないということをいい続けて来ましたが、ただ、原爆の惨禍を体験した人は年々減ってきています。その中で、核兵器の恐ろしさや長年の放射能の被害も含めた原爆の苦しみをどう語り継いでいくのか、今後の記憶の継承には直接思いを話を聞いた人、または遺品などを見て少しでも思いに触れた、今を生きる世代が次の世代にどう、話をつないでいくのか、その地道な努力が必要になると思います。」

前場貴子「はい、ありがとうございました。」 "

この特集に当てられた時間は 1460 秒であった、放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】裁判所に挑む“伝説”の元裁判官：結論→問題あり

裁判所に再審請求を行う元裁判官の弁護士について以下に朱記したように VTR で取り上げられていた。

ナレ「その日、裁判所内の記者会見場は、騒然としていた。92歳の女性が40年にわたって、無実を訴え続けている事件。最高裁判所は、地方裁判所も高等裁判所も認めた最新の開始を取り消す決定を行った。」

弁護士「特に最高裁ってのは、罪のない人を救済する最後のところなんでね。それが逆の方向に行くようでは、もうちょっと話にならないと思って、がっかりしてます。」

ナレ「元、裁判官、木谷明氏、81歳。今は弁護士として主に冤罪事件の救済に取り組んでいる。最高裁調査官。東京高裁裁判長など、裁判所の中樞を歩みながら1000件に1件といわれる無罪判決を、30件も言い渡してきた。そのすべてが上級審で覆ることなく、確定している。」

記者「刑事裁判で一番大事なことは何ですか？」

木谷氏「端的に言えばやっぱり無実の人を、処罰しないということですね。」

ナレ「法廷での活躍は、刑事裁判官を描いた漫画のモデルになっているほどだ。」

ナレ「しかし彼の信念と主張が、今、裁判所で必ず受け入れられているわけではない。」

木谷氏「これはもう弁護士としての感覚じゃなくて、裁判官としての感覚で、これが無罪以外の結論がどうして出てくるんだと。そういうのが私には、全然理解できない。何考えてるんだって、一発、出してやりたいという気持ちにはなりますよ。」

ナレ「奮闘が続く、その日々を追った。」

"記者「エスカレーター・エレベーターは？」

木谷さん「使わない、使わないあの一足は、足使っとかないと、歩けなくなる」"

木谷さん「会談があるのに、登らないなんて、そんなもったいないことできないですよ。そういうことなんです。」

木谷氏「おはようございます。ああーおはようございます。」

ナレ「裁判官生活38年のあと、法科大学院教授を経て、7年前、74歳で弁護士登録した。司法修習を終えてから、半世紀たっていた。裁判官時代は、伝説の存在だったという。」

弁護士「裁判官を長くやられて、で、無罪判決を多数出されて、それが上でひっくり返ったのほとんどないという、検察官が控訴・上告しないってのは、先生の判決が説得力があるからで、で、そういう物をきっちりお書きになれる人っていうのは、なかなかいないと思います。やっぱ、正義感とか、無罪を発見するっていうね、裁判のあるべき姿を、実践するというお気持ちが強い。それは非常に苦勞することなんです。軋轢も生むんですよ、それをいとわずにやっていらしゃって来たって、私は見えています、」

ナレ「今、弁護士として取り組んでいるのは、19年前、北海道井沼氏で起きた殺人事件の、再審請求。つまり裁判のやり直しを求めることだ。」

ナレ「2000年3月、札幌近郊の恵庭市。雪原のなかの農道気味で、黒く焼け焦げた遺体が見つかった。被害者は当時24歳の女性会社員、前の夜、千歳市内の勤務先を出た後、行方不明になっていた、被害女性は、200回を超え素無言電話に悩んでいた、捜査本部がし調べると、その発信元は、同僚の女性の携帯電話だった。2か月後、大越さんは移管して犯行を否認した。」

ナレ「検察は大越さんは、自分の車の中で、被害者の首を絞めて殺害し、灯油をかけて遺体を焼いたとして、殺人・遺体損壊の罪で起訴した。」

ナレ「発生当時から、弁護団の中心を担ってきたのは、伊藤秀子弁護士だ。」

伊藤弁護士「物証ゼロなんです。彼女と、殺人ないしは死体の焼いたってものを結びつけるのは、ゼロなんです。彼女の車押収されているんですけども、指紋も髪の毛一本、血痕から、百円の破けたようなものも、何にも来ないんですよ。」

ナレ「一審は、懲役16年の有罪判決。殺人に関する直接証拠はないものの、状況証拠の積み重ねを評価した。」

高裁、最高裁もこれを支持し、判決は確定、大越さんは刑務所に収監された。木谷さんは、裁判のやり直しを求める再審請求の段階になって、弁護団への参加を要請された。」

木谷さん「これも確定した段階で、無罪にしてくれたから、なぜこんな事件で再審までせねばならないのかっていうことが、私には信じられないですね。」

ナレ「大越さんは小柄で、被害者とは、身長で 15 センチの対格差がある」

木谷さん「非常にわかりやすく言えばね、助手席に乗ってる被害者を、後部座席から、タオルのような首を絞めて殺害したと、その殺害の方法自体がね、非力な体重も、軽い、身長も低い、こういう女性が一人でできるはずのものではないですよ。それをね、車から降ろして、燃やしたと。現場には足跡もないし、タイヤ痕もないし、死体を引きずったという引きずり痕もないんです。これ女性が一人で持てますか？そんなね 50 キロもするものをね、抱え上げて、そしてその焼却場所までね運んだということが、これはもう人間業ではないですよ。」

ナレ「一方、事件の前夜、大越さんはポリタンクに入った灯油 10 リットルを買っている。当初大越さんは、買った灯油はそのまま家に持っていたと弁護士にも説明していたが、成分が違うことが判明。すると、灯油は事件後、犯人かのように言われて、怖くなって捨てた。今ある灯油は、後で買いなおしたものだと言った。当初の説明はウソだったことになる。」

木谷さん「あそこで彼女が証言したと、非常に良くないまずいことでしたね。だけどそこで、そこでウソをついたから彼女が有罪だということにはならないと、いうことを裁判官がどうして、そのことでね、短絡的に有罪判断に結びつけるというのは、とんでもない間違いだと、追い詰められた被疑者・被告人というのは、本当に何もやっていない場合でも、不利な状況があると、身に降りかかる火の粉を払うつもりで、いろんな弁解をしますよ。」

ナレ「裁判のやり直しを求める再審請求は、これまで、二次、五回にわたって、棄却されてきた。そして今、再び、最高裁の段階を迎えている。大越さんは、去年、刑期を満了して出所した顔を出さないことを条件に、一度だけ記者会見している。」

大越さん「私は、罪に問われているような、殺人も死体損壊も行っていない。私の無実を信じ、戦ってくださっている先生たちに支えられて、特別抗告という道を選びました。必ず真実を、見抜いてくれる裁判官がいることを信じて、戦っていきたいと思います。」

ナレ「弁護団会議は、毎回札幌で開かれる木谷さんは書き上げたばかりの最高裁に出す文書案を携えて、空港にやってきた。」

"記者「北海道に行くのは、これでもう何回目ですか？」

木谷さん「えーそれは数えきれない。数えきれない。うんだって、2013 年からやっていますから。もう何年だ？6 年。ともかくこれ私が生きてるうちにね、なんとか、彼女をね、青天白日の身にしてあげたいというふうに思うだけで、まあ果たして私の寿命と競争になってきたから。残り時間が短くなってきているから。さあどうでしょう。」"

ナレ「何もしていないのは、苦手だ。機内でも関係書類に目を通し続ける。日本弁護士連合会は、支援事件として、最近交通費の支給を決めるまで、全て手弁当での応援だった。」

木谷さん「お邪魔します。おひさしぶりです。どうも」

ナレ「弁護団会議で、木谷さんが用意した追加文書の検討が始まった。遠慮のない意見が飛び交う。」

"弁護士「おまけ見たくなっちゃっています：」

木谷氏「あれ伊藤先生にね」

弁護士「私はこっち入れたほうがいいんじゃないかなーって」"

ナレ「議論は 4 時間を超えた。木谷さんは、弁護団のご意見番ではなく、実務を担う一員に徹していた。」



木谷さん「じゃあ分かった。そこは、5は一応これでまとめてみます。」

ナレ「また一つ、宿題を背負って帰ることになった。」

"木谷さん「あっしまった。間違えた。シチューを作るつもりでカレーを開けちゃった。まあいいやカレーにしとこう」

ナレ「妻を亡くして十年。身の回りのことはほとんど自分でするようになった。」 "

"木谷さん「子どもたちがそばにいて、しょっちゅう顔を出してくれるものですからね、寂しくはないし、有難いことですね。」

ナレ「食事が終わると書斎に上がって、札幌の会議で指摘された書面の仕上げにかかる。」 "

木谷さん「私の年配の人はですね、もうとうにご隠居の身で、みんな楽しい老後を過ごしていますよ。私の場合はそれができない性分だたこともあるし、家内が生きていたらね、私も今ごろほいほい海外旅行かなんかにいたかもしれないですね。なんとか、生きている限りは、少しでも社会の役に立つということをしてほしいという気持ちは持っています。」

ナレ「木谷さんは、昭和の囲碁界の指導的存在だった。木谷實九段の次男。有名な木谷道場に集まる多くの内弟子と一緒に育った。東大法学部在学中に、司法試験に合格。エリートコースを歩み、40 台で最高裁調査官を務める。最高裁判事を支える重要な役割だ。そして浦和地裁で裁判長となり、法廷で独特の訴訟指揮を展開した。そのことの様子がうかがえるものがある。」

ナレ「刑事裁判官の群像を描いた人気の漫画、イチケイのカラス。イチケイとは、裁判所の第一刑事部のこと。ここに木谷さんをモデルの一人にした裁判長が登場する。裁判長は、冒頭被告に告げる。」

裁判長「答えたくないことは、答えなくていいですし、ずっと黙ったままでもかまいません。そのことによって不利に扱われることはありません。ただ、私としては、本当にやっていないならば、必ず行ってほしいと思います。」

ナレ「普通の黙秘権告知を超えて、こう語りかけた後、さらに、」

"裁判長「判決が出た後に、実はやってないといっても、認めてもらいにくくなりますから、他にも言いたいことがあるならこの機会に言ってほしいと思います。よろしいですね？ 検察官の述べた起訴事実には間違いはありますか？」

被告「私はやっていません」 "

ナレ「裁判長が満足げな表情をしたのはなぜか、その思いが引用される。」

裁判長「私は否認された場合、むしろ『ヤッター！』と喜ぶことにしている。そのことによってより注意を払い、冤罪を避けられるかもしれないのだから。」

木谷さん「ヤッターっていう表現は、ちょっと私の表現じゃありませんけれども、あの一否認してくれるとやりがいを感じると、そういう意味では、まあ、やった一ですよ、だからそういう感情を持ったことは間違いありません。被告人がしゃべってもらえないと、それは、真相解明につながりませんから、できるだけ何度も、しゃべってほしいと。言う形で、発言を促しましたよ。」

ナレ「そうやって、懸命に取り組んでも、冤罪をゼロにはできない。それを救うのが、再審制度だ。今の制度には不備があるとして、再審法改正を目指す市民の会が、5月、発足した。」

"木谷さん「例えばその、警察官とか、とんでもないことだと思いますけれども、せめて・・・」

ナレ「木谷さんも、その運営委員になった。その主な主張の一つは、再審開始を一つの裁判所が決めたら、検察の不服申し立ては認めず、再審開始を遅らせないことだ。この日注目されたのは、最高裁による再審開始判断を待つ、鹿児島、大崎事件弁護団のメッセージだ。」 "

大崎事件弁護士「原口あや子さんは 92 歳になります。事件の時には 52 歳でした。ちょうど今年 40 年です。もうまもなく再審開始が確定して無罪になることを私は思っています。信じています。でもね、うれしくないんですよ。だってこんなに時間がかかってしまったから。」

"ナレ「大崎事件とは、」

原口アヤコさん「本当に何にもやっていないのに、こんな長い罪を着せられて、本当にもう残念で警察が憎いでした。」 "

ナレ「男性を殺害したとして、逮捕された原口アヤコさんは 40 年に渡って、無実を訴え続けている。有罪が確定し、10 年服役した後、再審を請求。いったんは地裁の開始決定を得た。」

原口さん「うれしいでした。本当に良かったなあーと安心して考えてきましたが」

ナレ「しかし、検察の不服申し立てを受け、再審開始は取り消された。」

原口さん「無実だけは、どうしてもそのことは死にたくないんですよね。」

"ナレ「そして 3 度目の申し立て、」

原口さん「最後まで、頑張りますから、皆さんも応援してください。」 "

ナレ「今回は地裁に続き、高裁も再審開始を認めた。あとは最高裁の判断を待つだけ。」

"弁護士「ハッピーバースデートゥーユー」

ナレ「92 歳。話すのも不自由になっていた。」

弁護士「時間かかりすぎだよね。ねえー」 "

ナレ「6 月末、最高裁は決定を下した。」

[CM]

"ナレ「最高裁の決定を受けて、大崎事件弁護士団は、緊急の記者会見を行った。」

弁護士「木谷先生は隣に。こちらにおねがいします。」 "

鴨志田祐美弁護士「地裁と高裁をした再審再審開始決定を、えー最高裁が自分で取り消したというそういう内容の決定だったと。取り消さなければ、著しく正義に反するものと認められると。この再審決定を取り消さなければ、著しく正義に反すると、最高裁が、この第一小法廷の 5 人の判事が、全員一致でこのように決定したと。」

ナレ「地裁・高裁で認められた最新の開始について、最高裁が、差し戻すのでもなく、自らの判断で取り消したのは、初めてのケースだった。」

木谷さん「最高裁ああいいう形で取り消すってことは、まあ最高裁が、なんかその、『自分は神様だ』というふうに言っているのと同じですね。でだけでも、そうじゃない。最高裁もやっぱり人間なんです。だから人間は常に、過ちを犯すと、いうことなんでね、であの一司法に対する信頼というものは、まあその、裁判所が自分は間違っていないなかったと、言い張ることによって、得られるんじゃないかと、裁判所の人間だから、時に過ちを犯すとその過ちを率直に認めると、それが裁判所なんだと、言う風に国民に思ってもらわなければ、司法に対する信頼は繋げない。」

"ナレ「無実の人を処罰しない。木谷さんは、この日も法廷に向かっていた。」

記者「木谷さん。裁判所今、信頼していますか？」

木谷さん「ねえーあの、いつも信頼して、期待に胸膨らませて、裁判所に来ていますよ。だけでも、現実には、失望させられることが多い。だけでも、これで絶望してしまったら、おしまいだから、なんとか絶望しないようにって、頑張って、まあこの次には今日には、勝てるんじゃないかって言う風に頑張っています。」 "

VTR を受けてスタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り返された。

膳場「取材した真木記者です。木谷弁護士話す言葉や、感覚、感性が、司法の世界との隔たりを感じさせない。

とっても、親しみやすい方ですよ。」

"真木記者「そうですね、人間的な方でね。」

膳場「その木谷さんが、ここまで冤罪の救済に熱意に持って取り組まれているのはなぜなのでしょう？」"

真木記者「あの一木谷さんは、自分がもし身に覚えのない罪で、服役させられたり、死刑にさせられたりしたら、どれほど恐ろしいことかと。自分はずっとそれを考えながら、刑事裁判をやってきたと、書かれているんですね。確かに冤罪っていうのは、私たち他人事のように思いがちなんですけども、もし自分や家族のことだと考えたらですね、これほど耐え難い理不尽って、ないですよ。で、そこから生まれてきた信念だと。思います。」

日下部「あの一木谷さんの言葉でね、印象的だったのは、裁判官も人間なんだから、時として、あやまちを犯すんだと、それを率直に認めることがまあ、司法にたいする信頼につながるこういうことを言っている」

真木記者「そうですね、もう私もそれでこそ、裁判所の信頼も生まれると思うんですけども、ただ、まあ再審開始するっていうことは、その一確定した判決とか、裁判所の先輩たちの判断が間違ってるかもしれないと、いうことなので、そういうことをしたら、裁判所の信頼に傷がつくと、考えも、する人もいるんですね。で、だから再審への取り組みは、裁判官にとって非常に大きく変わってしまうこともあります。そういう問題を解決するためにも、まあいまの刑事訴訟法では、最新の具体的手続きってのはほとんど定められていないんですが、そこをきちんと法的に整備するなど、という主張が出てきています。」

金平「このところね、三権分立の危機、具体的にはその、裁判所が政権に対して、再審判断や、判決をだすによって、付度してるんじゃないかって、という声も聴かれますけども、司法記者経験の長い真木さんどう思われますか？」

真木記者「あの一政権への付度かどうか分からないんですけども、まあ確かに裁判所の中の、自分の評価っていうのは、考えてしまうということはあるかもしれません。で、先日の大崎事件のように、ですね、最高裁がこの再審開始を取り消さなければ、著しく正義に反すると、いう決定をかなり強引な、形でその、強引な理屈を出したりするとですね、地裁や高裁の裁判官はですね、怖くて、再審なんかできなくなってしまうという危惧もあるんですね。まああの、誰もが木谷さんのように、生きられないかもしれませんが、自分で判断して、その考えを貫くという職業的な良心を裁判官には期待したいと思いますね。」

膳場「はい以上特集でした。」

この特集に当てられた時間は 1549 秒であった。

スタジオで金平キャスターが「このところね、三権分立の危機、具体的にはその、裁判所が政権に対して、再審判断や、判決をだすによって、付度してるんじゃないかって、という声も聴かれますけども」とコメントしていたが、「付度してるんじゃないか」という声の主が誰であるかは一切言及していなかった。

民意という移ろいやすいものに立脚する政権や国会議員と、身分保障がされていて実務を担っている官僚や司法を比較した際に、なぜ政権への付度という話になるのかがさっぱりわからない。予算も法案のための国会対策を必要としない上に弾劾裁判あるいは国民審査の他には身分を失う可能性がない司法が政権に対して付度をしなければならぬ理由がどこにあるのだろうか。

このように、常識および制度論で考えて政権に対して付度をする動機や理由がどこにも存在しない司法に対して声の主を伏せた上で「政権に対して付度しているんじゃないか」という声を紹介するというのは、言いがかりもいいところである。

司法に対してこうした疑念を投げかけるのであれば、せめてその疑念を検証できるような形で投げかけるべきであって、出所不明の疑念の声を公共の電波で一方向的に垂れ流すというのは、政治的な公平性という点でも極めて問題のある行為であると言える。

VTR が良質なものであっただけにスタジオでの金平キャスターの言いがかりにも近いコメントは非常に残念であった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨  
特になし

#### 検証者所感

##### ・オープニング

金平キャスターが「ええ、歴史を紐解きますと、日本は 1910 年に韓国を併合し、35 年にわたって植民地支配を続けました。それが敗戦で終わりを告げ、両国の国交が樹立されるまでになんと 20 年かかりました、築き上げた関係が崩れるのは一瞬です。ここは頭を冷やすときです。」とコメントしていたが、敗戦後、最初の 7 年間は日本が主権を失っていた状態であるから仕方がないにしても、主権を回復してからさらに 13 年間もの時がかかり、ようやく佐藤栄作政権と朴正熙政権の間で日韓基本条約が結ばれ国交が樹立された、またその当時は旧社会党や日本共産党そして左翼系の学生運動が日韓の国交樹立に反対していた、ということ振り返ってみても文字通り隔世の感がある。

##### ・【特集】原爆の記憶をどう伝えていくのか

スタジオで金平キャスターが「メディアでね、仕事をしている人間にとってはその広島長崎への原爆投下というのは決して忘れてはならないことですよね。」とコメントしていた。金平キャスターが個人としてこうした見解を抱くことはもちろん自由であるが、あの戦争においては原爆のほかにも、シベリア抑留や満洲からの引き上げ、中国の残留孤児など様々な困苦に見舞われた人々もいる。原爆を忘れてはならないのと同様にシベリア抑留なども決して忘れてはならないことであろうと思うが、メディアが原爆を度々取り上げる一方で、シベリア抑留などそれ以外の部分の取り上げ方が手薄になってしまうということはあってはならないだろう。こうした戦争の取り上げ方に偏りがいいのか、ということについては引き続き注視が必要であろう。